**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第４回　（２０１４年８月５日）**

**・第４回の勉強範囲：「第二版の出版のことばと序文」(9)頁**

・📖（読むp(9)）**シュリー・ラーマクリシュナの内に誰もが満たされる**

**貧しい村に生まれ育った無学の神職、ラーマクリシュナの話を聞くために寺院にやって来た人びとには、老若男女、僧侶や家住者、無学の者や学識者、平民や著名人、あらゆる職業の人びと、聖者や罪びと、唯物論者や不可知論者、さまざまな教派のヒンドゥ教徒や他の宗教に属する信者など、じつに多様であったことは非常に興味深い。心の空白を抱えて訪れた彼らのほとんどが、シュリー・ラーマクリシュナに満たされて帰っていったのである。これはイエスが信者たちを満足させたのと同様であるが、師は奇跡を見せることではなく、霊性の智慧に満ちた、誠実でシンプルな言葉によって彼らを満たしていかれたのだった。**

**それでは、師の教えはたんなる言葉だったのだろうか？かくも多くの人をひきつけ、また、彼らを満たしたものはなんだったのだろうか？**

（👉　今回の解説は、前回の「シュリー・ラーマクリシュナの絶えざる神意識」についての追補もかねた説明になっています）

（解説）

前回、シュリー・ラーマクリシュナのさまざまな霊的な状態は聖典の実証であった、とお話しました。今日はその実例をあげましょう。

それは同時に、シュリー・ラーマクリシュナの霊的特徴の要約です。

その霊性がいかに高く、特別か、ということがわかります。

**シュリー・ラーマクリシュナの霊的な特徴：**(1)~(7)

**（１）シュリー・ラーマクリシュナは、ヒンドゥイズムの３つの異なる伝統──「二元論的」「限定された非二元論的」「非二元論的」──をすべて経験し、調和した。**

「神様（偉大な魂）」と「個人（個人的な魂）」の関係をどのようにとらえるか──それに関してヒンドゥイズムでは、３つの異なる哲学の伝統的潮流がありました。

ひとつは、「**二元論的（ドワイタ）**」。偉大な魂と個人的魂は別々。神様と個人は別々。「神様は海、信者は池の水」というように、池の水は海と一緒になることはない、信者は神様と一緒になることはできない、というとらえ方。

しかし個人的なアートマン（魂）は偉大なアートマン（魂）の一部分だ、と考えることもできます。それが「**限定された非二元論的（ヴィシシュタアドワイタ）**」。個人は小さくても、偉大なものの一部分である。偉大なものから離れているわけではない。神様と個人は別々な存在ではない、という考え。

もうひとつは、「それもアートマン、あれもアートマン」というとらえ方。個人的（ミクロ）と偉大（マクロ）というその観点では異なりますが、両方とも魂には違いない、アートマンには違いない。そのことを考えれば、神様と個人は一緒、という考え。これが「**非二元論的（アドワイタ）**」です。

これら３つの哲学は、それぞれ考えが異なるとされ、哲学者はその潮流ごとに自分の哲学の主張をし、議論と論争を繰り返してきました。

しかし、**シュリー・ラーマクリシュナの特徴は、３つすべてを実践したこと、そしてそれらを調和したこと**でした。

それより以前には、一人の人が異なる霊的な考えを実践することは矛盾であり、不可能でしかありませんでしたが、ラーマクリシュナはすべてを実践し、証明し、調和した。このことはとても特別です。では、どのように実践しましたか？

ラーマクリシュナは、ハヌマーンの言葉を引用していますね（👉『福音』p343ほか）。

あるとき、ラーマ神様はハヌマーンにたずねました、「お前は私をどう見るか」と。ハヌマーンは、「私のからだ意識があるとき、『あなたは神様、私は信者（＝二元論的）」』と見ています。からだ意識が少し薄れて、からだ意識と同時に魂への気づきもあるとき、『私はあなたの一部分です（＝限定された非二元論的＝たとえば私は神様のこどもという感覚）』。と見ています。からだ意識がまったくなくなって、たましい意識だけのとき、『あなたとわたしは一緒になります（非二元論的）』」

ハヌマーンが言ったように、からだ意識がある限り、非二元論的境地を経験することはできないが、霊的な実践を進めて、たましい意識だけになったとき（たとえばサマーディのとき）、それは可能となるのです。

それは本当のハヌマーンの言葉なのか、ラーマクリシュナはわからなかったでしょう。

しかし自らの実践により、さまざまな意識状態を経験することで、確かに、３つの哲学は調和するのだ、ということが理解できました。

我々から見れば、ラーマクリシュナは歴史上確実に実在した人物です。その方が聖典の内容を経験した、という意味は深いです。

**（２）シュリー・ラーマクリシュナは、ヴィシュヌ宗派の３つの信者の状態──バイヤダシャ、アルダバイヤダシャ、アンタルダシャ──をすべて経験した。**

ギャーナ・ヨーガとウパニシャッドとヴェーダーンタ哲学では、神様を「ブラフマン」「偉大なアートマン（魂）」、個人を「ジーヴァ」「個人的なアートマン（魂）」ととらえます。

一方、ヒンドゥ教の一潮流であるヴァイシュナヴァ（ヴィシュヌ宗派。ヴィシュヌ神を信仰する）は信仰の道で、かれらは、個人を「神様の信者」ととらえています。その宗派の考えに、信仰者の３つの状態、というものがあります。

①**バイヤダシャ（Bhyadash）**。バーヤが「外」、ダシャが「状態」という意。この状態では、信者は神様を礼拝し、神様を思い泣き、歌い、踊ります。しかし外の環境にも気づきがあり、理解できています。

②**アルダバイヤダシャ（Ardha-Bhyadash）**。アルダとは「半分」という意味。半分外、半分中の状態。外への意識がだんだん中に入ってきて、神様への気づきがより深くなった状態。この状態では、信者は歌は歌えない。しかし踊ることはできます。

③**アンタルダシャ（Antardash）**。アンタルは「中」。もっと深くなって、すべてが内側に入ります。歌はもちろん踊りもできなくなる。信者は物質のようになります。なぜ？　ぜんぶ中に入りましたから。すべて神様。信者はその状態。

ラーマクリシュナは、それら３つの状態の例として、ガウラーンガ（シュリー・チャイタンニャ）を引用しています。（👉『福音』p297ほか）

そしてシュリー・ラーマクリシュナも、ほんとにチャイタンニャと同じ状態を経験しているのは『福音』を読めばわかります。これも面白い。シュリー・ラーマクリシュナの特徴のひとつです。

**（３）シュリー・ラーマクリシュナは、ヴィシュヌ宗派の５つの信仰の態度──シャーンタ、ダーシャ、サッキャ、ヴァーッツァリア、マドゥル──をすべて経験した。**

ヴィシュヌ宗派は、信者それぞれが神との特別な関係をつくることをすすめます。それが霊的実践を助け、神を悟る方法だとしています。身近な人間関係を、神と自分との関係に重ね合わせることで、より深い感情で神様とつながることができる、としているのです。

その５つの態度とは？

**シャーンタは、静かな態度**。たとえば、神様を**「創造者」**と考える態度や（キリスト教でもあるように）**「父親」**と考える態度。古代の聖者たちは、神様に向かってこの態度をとっていました。

**ダーシャは、神様は私の「主人」、私は神様の「召使い」という態度**。これはシャーンタより深い。しかし召使いといっても、我々が考えるようなお給料をもらう種類の召使いではありません。（笑い）自分の見返りのことは一切考えず、神様をお世話します、という態度。ハヌマーンが有名な例。

**サッキャは「友達」**。たとえば、ヴリンダ―ヴァンのシュリ―・クリシュナの友達です。その友達は、クリシュナに甘いマンゴーを食べさせたかったから、まず自分で甘いか味見をして、残りをクリシュナにあげました。（笑い）ちょっと考えてみてください。神の信者はそうしますか？　自分が食べた果物の残りを神様にお供えしますか？　しないですね。お供えものの料理の最中に味見はしないし、においもかがない。それほど気をつけます。半分食べて半分あげる、というのは友達の態度でしょ？　それくらい神と近い。

**ヴァーッツァリアは、神様を自分の「子供」と見る母親の態度**。神を子供と考えて礼拝します。シュリー・クリシュナの母ヤショーダーは、神様を守りますという、この態度でした。ふつうは神様に守ってください、守ってくださいとお祈りします。そのためのマントラはたくさんあるでしょう？　しかしヤショーダーは、私が守らなければ神様が傷つく、私が神様を守ります、という態度でした。

**マドゥルは、「恋人」の態度。「だんなさん・奥さん」の態度**。

（👉『福音』p49ほか）

ラーマクリシュナは、これらすべての態度を実践していました。

たとえば、シャーンタの実践。ラーマクリシュナは、神様を創造者、神様をお父さんと考えて実践しました。

ダーシャは、エゴを取り除くために実践しました。ハヌマーンの状態に入って、神様の召使いを実践したのです。『ラーマクリシュナの生涯』によると、本当のサルのようになって、木の実だけを食べ、木に登っておしっこもしていました。からだも変化して、しっぽが突き出てきました。

サッキャ・友達の態度の実践は、『福音』『生涯』を読む限り実践していないようにみえますが、そうではなく、ラーマクリシュナはスワーミージーにたいしてその感覚（フィーリング）がありました。エピソードをいくつか挙げましょう。まずは水ギセルの話。ラーマクリシュナは、水ギセル（たばこの一種）を少し吸って、そのあとそのキセルを「どうぞ吸ってください」とスワーミージーに渡しました。スワーミージーはいやがったが、タクール（シュリ―・ラーマクリシュナ）が差し出したから、仕方なく吸いました、なかば強引で！（笑い）

もう一つのエピソード。

インドでは、「友達」はよほど深い関係でないとそのように呼ばない。手をつないでいる男子高校生は、よほど仲が良い証拠です。仲の良い友達は、時には肩を組んで歩きます。

シュリー・ラーマクリシュナが亡くなったあと、スワーミージーたちはボラノゴル僧院で出家生活をしていましたが、ある日のこと、アカンダーナンダジとスワーミージーが森に出かけることにしました。

森に着いたスワーミージーは、「別々の道で行きましょう。あとで、また同じ道で会いましょう」と提案しました。別れて歩いたアカンダーナンダジはその日、見ました。スワーミージーとラーマクリシュナが肩に手をまわして二人でゆっくり歩いているのを！　その場所は、自然がとても美しい、花がたくさん咲いている場所・・・。

別々に歩いた理由がわかったアカンダーナンダジが到着して待っていると、スワーミージーが、ガンガーダル（アカンダーナンダジのこと）、もう着いていたの？」と言いました。「ああ。私は、肩に手をまわして、相手にペースを合わせて歩く必要はなかったからね」と答えました。「あなた、見たのですか！」（笑い）──ラーマクリシュナとスワーミージーの関係、これほんとうにサッキャ、友人。

ベルル・マトでの別のエピソード。

タクールを礼拝する儀式はほとんどプレマーナンダジがしていました。

ですがある日、スワーミージーが儀式を頼まれて祭壇にいきました。しかし、儀式をする様子はいっこうにありません。しばらくしてスワーミージーはお供え物をタクールに差し出して、「ヤール、食べてください、ヤール」と言って泣きました。「ヤール」というのは、ヒンディ語で「とても仲良しの友達のこと」です。ラーマクリシュナとスワーミージーの関係はサッキャ、友達。これらのエピソードはその興味深い例です。

次にヴァーッツァリア。神様を自分の子供と見る実践。

『生涯』に載っているのは、ラーム・ラーラー（幼子ラーマ）。シュリー・ラーム・ラーラーの像のエピソード。

長年その像を礼拝してきた信者がドッキネッショル寺院を去るとき、タクールにラーム・ラーラーの像を預けていきましたね？　そのラーム・ラーラーにタクールは食べさせていました、沐浴させていました。覚えていますね？

それから、これはラーマクリシュナの例ではありませんが、ゴパール・マー。彼女は、ラーマクリシュナを息子とかんがえた実践していました。

シュリー・ラーマクリシュナが特別なのは、**ひとりの人が、こうした５つの態度をすべて実践し、経験していること**です。ふつうは、ひとりの人が、ひとつの態度を実践することで精いっぱいです。

**（４）シュリー・ラーマクリシュナは、５つの信仰の態度のほか、神様を母親と見る実践もおこなった。**

神様を「おかあさん」と考える態度は、ラーマクリシュナのとても大きなムードですね。タクールはいつも、マザー・カーリー、マザー・カーリー、おかあさん、おかあさんと言っていました。おかあさんが「私に助言します、私に食べさせます」と感じていました。これも特別です。ヴィシュヌ派の５つのムードの中にこれはないですね。タクールは**５つの態度のほかにこれも実践しました。これも特徴です。**

**（５）シュリー・ラーマクリシュナは、５つのサマーディを経験した。**

サマーディを動物にたとえて説明することがあります。魚みたい、アリみたい、ヘビみたい、サルみたい、鳥みたい。（👉『福音』p1044ほか）

・**魚**みたいなサマーディ。これはMna-vatといいます。Mnaは魚、vatは状態。信者はサッチダーナンダの海にはいって、自由に遊んで、気持ちよく泳いでいるうちに、サマーディにはいる、これがミーナ・ヴァット。



・**アリ**。アリのように、信者（ジーヴァ（個人的な）・アートマン）はゆっくり進んでサマーディに入ります。Ppilik-vatといいます。ピピーリカはアリ。

・**ヘビ**。アリはまっすぐ進みますが、ヘビはくねくね進みますね。arpa-Vatといいます。サルパはヘビ。クンダリニーがうねるように動いてサマーディに入ります。

・**サル**は枝から枝へジャンプしますね。木の下から上の枝へジャンプを繰り返しながらジーヴァがサッチダーナンダに入ります。Kapi-vat。カーピはサル。

・**鳥。**Paksh-Vat。パクシーは鳥。鳥のようにジーヴァ・アートマンが、サッチダーナンダの空に喜んで飛んでいます。やがてサマーディに入っていきます。

ふつうの人は、たまにこれらのひとつに入る。しかし、ラーマクリシュナは５つのサマーディ、すべてを経験しています。

リシケシから来た高い知識のお坊さんは、ラーマクリシュナをみてびっくりしました。（👉『福音』p1044）「あなた５つのサマーディをすべて経験したのですね。あるときアリ、あるとき魚、ある時ヘビ…。いろいろなサマーディの状態があなたにあらわれている！　素晴らしいです！」

**（６）シュリー・ラーマクリシュナは、サマーディのいろいろな状態を経験した。**

シュリー・ラーマクリシュナは、サマーディのとき、あるときは子供のように、あるときは若いひとのように、あるときは賢いひとのように、あるときは気ちがいのように、あるときは汚いものなど何も気にしない（何が純粋で何が汚いか、何も気にしない）ようになりました。

**（７）シュリー・ラーマクリシュナは、さまざまな宗教の教えを実践して、イエスやムハンマドのヴィジョンを見た。**

以上、(1)~(6)に加えて、シュリー・ラーマクリシュナは、キリスト教やイスラム教などもその教えを実践して、結果、イエスやモハンマドなどのヴィジョンを見ました。

いかにシュリー・ラーマクリシュナは特別か。『ラーマクリシュナの福音』『ラーマクリシュナの生涯』を読むと、どれくらい霊的に特別で神聖な方か、わかります。今日、私は要約をしただけ。何も付け加えて話してません。

（『福音』勉強会第４回、以上）